



肉便器退魔師 ニコト

DOJIN
R18
成人向け

女騎士の城

私の名は姫原ミコト。都内の学校に通う真面目で普通の女子学生だ。だがそれは表の姿。我が姫原の一族は古から退魔を生業としており、低級妖怪や高位魔族の討伐から、政府要人の護衛までを引き受けている名門だ。今日も私は、一族の長たるお婆様から、低級妖怪を討伐する任務を受け、町外れにある公園へとやってきた。

【ミコト】「……ここに潜んでいるのはわかっている。」

おとなしく出てくれば楽にあの世へ送ってやる。抵抗するなら容赦はしない」
【妖怪】「ゲエツ……！ お前、姫原の退魔師かつ！ くそっ！」

私を見るなり大慌てで逃げ出そうとする妖魔に、私は腰の退魔刀を抜き、投げつける。退魔刀は妖怪の後頭部から顔面に向けて貫通し、妖怪は声も上げる事も出来ずに絶命した。





【ミコト】「…抵抗しなかったから、一撃であの世に送ってやった。次は悪さをするんじゃないぞ」

私は退魔刀を回収し、刀に付着した妖怪の体液をびしやりと振り払う。

妖怪の死体は一般人の目には見えないし、朝日を浴びれば蒸発し完全に消滅するだろう。

これで今日の任務はお終い。私にとっては簡単すぎる仕事だ。

しかし、私には不満があった。

【ミコト】「…このような雑魚の相手をするために、

厳しい修行に耐えてきたわけではないのだから…」

私は幼い頃から天才と持て囃され、一族では最強の剣技を身につけるに至った。

もはや姫原の一族では、私と二対二で勝てる退魔師は存在しない。

にもかかわらず、私には重要な任務が与えられず、このような雑魚の討伐任務ばかりが与えられている。

正義を守るため、もっと強大で邪悪な妖怪のために、私の力を振るうべきではないのだろうか。

そんな疑問を抱えたまま、私は姫原の本拠地である神社へと帰還した。





帰還すると、お婆様が社の前で火を焚き、武器を並べて祈禱を行っていた。
妖怪相手に通常の武器は通じない。　こうやって祈禱し、神の力を得る必要がある。
私の帰還に気がついたお婆様は、祈禱の手を止めて、私に向かってねぎらいの言葉をかけた。

【お婆様】「…ミコトが、今日もよくやったね。　明日も学校だろう？　さあ、ゆっくりお休み」

いつもなら素直にねぎらいを受けて休む私だが、
ついに私は、積年の疑問をお婆様にぶつけてしまった。

【ミコト】「…お婆様、少しお話があります。　なぜ私が…一族で最強の剣技を持つ私が、
あのような低級妖怪ばかりを相手にしなければならないのでしょうか…！
一族の正義のため、私はもっと強大な魔族と戦うべきではないのでしょうか…！」

それを聞いたお婆様は、少し目を丸くした後、私を見下すように笑いはじめた。





【お婆様】「…カッカッカ。まだ下の毛も生えていない未熟者が偉そうに。」

ミコトよ、退魔師が魔族に負けた場合、どうなるかは知っていますよ？」

【ミコト】「男は食われ、女は肉奴隷にされる。その運命を辿った同業者は数多く見てきました」

【お婆様】「ではミコトよ、貴様が敗北した時はどうする？」

【ミコト】「…その時は潔く自害いたします。その覚悟は出来ております！」

私がそう言うのと、お婆様はいつそう大きな声で笑った。

【お婆様】「カッカッカ！ だから貴様には雑魚相手の任務しか与えられぬのよ。」

何が自害じゃ。貴様を育てるのにどれだけの時間と金と霊力が注ぎ込まれたと思っておる。

勝手に死なれては困るのよ。貴様の誇りなど知ったことが！」

【ミコト】「うぐっ…それはっ…」

私は唇を噛み締め、自分の考えの浅はかさと未熟さを痛感した。そして何とか次の言葉を紡ぎ出した。





【ミコト】「…私の未熟さ、考えの浅はかさ、深く反省いたします。
その上でお尋ねします。 どうすれば私に重要な任務を任せて貰えますか!？」

私には一族最強の退魔師としての誇りがあった。 しかし、自らの未熟さを暴露してしまった以上、
絶対にお婆様に認めて貰うて、重要な任務を任せてもらうしか、誇りを取り戻せないと思ったからだ。

【お婆様】「やれやれ、本気のようなね」

私が必死になって問い詰めると、お婆様は重苦しく口を開いた。

【お婆様】「ミコトよ。お前が上級魔族に敗北したとしても、女の身であれば殺されぬ。

生きて再戦する事も可能じゃ。 しかし、そのためには、お前が陵辱に耐えねばならん。
魔族の徹底的な羞恥、陵辱に耐えきれただけの精神力があるかどうか、証明して見せよ。
それが出来るなら、お前の実力にふさわしい任務を与えてやる。 どうじゃ?」





【ミコト】「…わかりました。やります。証明してみませす！」

退魔師として生きる時、正義を守ると決めた時、命を捨てる覚悟を決めました。であるならば、女のプライドと幸せを捨てる事くらい、造作も無い事です」

退魔師としてのプライドを守るため、私はお婆様に太見得を切った。
お婆様は目を丸くした後、面白そうに笑い始めた。

【お婆様】「カッカッカ！ よくぞ言い切った！」

ならば最初の命令じゃ。処女を捧げる相手を、明日連れてこい。
じゃが…もし普通の相手を連れてきたら…その時は分かるな？」

【ミコト】「…わかりました、お婆様。きつとお婆様が納得出来る相手を連れてきます」

魔族の陵辱に耐える事が目的である以上、クラスメイトを連れてくるなど出来るはずもない。
もっと醜く、薄汚く、嫌悪感すらもよおす者…そうでなければお婆様は納得しないだろう。
どのような相手が良いだろうか。 そんな事を考えながら、私は自室に戻り眠りについた。





翌朝。私はいつもの朝稽古を終え、制服に着替えようとした所で、異常に気がついた。

「ミコト」「あれ……？ どうして下着が……」

下着が見当たらないのだ。ダンスの中を調べてみても、替えの下着も全て無くなっていた。

「ミコト」「全部洗濯するはずもないし……なんで……」

私は疑問に思い使用人に尋ねると、お婆様の命令ですべて回収したとの事だった。

「使用人」「お婆様の指示でしたが、まずかったですか？ 下着持って来ましようか？」

「ミコト」「……いえ、大丈夫です。問題ありません」

これも私に与えられた試験の一つなのだ。私はノーパンのまま制服に着替え、学校へと向かった。





【女子】「ミコトさんおはよう！」
【ミコト】「ああ、おはよう」

私は文武両道を目指しており、学校では勉強でも運動でも常に上位に入っている。
ついでに、世間的に見て美形らしく、男子からのラブレターも飽きるほど受け取ってきた。
そんな状況なので、不本意ながら学校では人気がある。

【男子】「今日もミコトさん可愛いなあ」
【男子】「マジでアイドル以上だよ。顔もスタイルもパーフェクトだよな…」
【男子】「ああ、付き合いてえ…ていうかヤリてえ…中出しして孕ませてえ…」

男子が小声でボソボソと噂する声も、訓練している私には丸聞こえだ。
いつもなら受け流す他愛ない言葉なのだが、帰宅までに処女を捧げる相手を決めなければならず、
さらに今日は下着を付けていないので、妙に気になってしまう。
私はいつ翻るかわからないスカートにドキドキしながら、学校へと登校した。





【ミコト】「はぁ……どうしよう……」

結局、処女喪失の相手が決まらぬまま、放課後を迎える事になってしまった。
ノーパンのスカートが気になって、相手を考えたり探したりするどころではなかったからだ。
私は今週の当番である、薄汚れたトイレの掃除をしながら頭を抱えていた。



そもそも、私が処女を与える相手が普通の男である場合、
お婆様が納得しないという事情もあるが、その相手がどういう人間かという問題がある。
私はこの学校で人気があり、学校外でも姫原家は名門であり、その娘という事でそれなりに名が知られている。
そんな女の処女を奪ったとなれば、大抵の男は自慢げに話し、彼氏面をするだろう。そうなると正直面倒臭い。

【ミコト】「お婆様を納得させつつ、他言せず彼氏面もしない、都合の良い相手か……」

そんな都合の良い相手がいるのかと考えながら掃除を続けていると、隣の男子トイレから声が聞こえてきた。



【ミコト】「なんだ？　どうかしたのか？」

【男子】「あ、ミコトちゃん。このトイレブラシ、誰かがいたずらで便器に突っ込んでいったんだ。ミコトちゃんクラス委員だから、先生に言って新しいの貰ってきてくれない？」

私が様子を見に行くと、男子は糞尿がこびりついた使い古しのトイレブラシを見せつけた。

【ミコト】「…どうせ交換の時期だから丁度良かったと思っておこう。」

新しいブラシを貰ってくる。ついでにこれも処分しておく」

【男子】「流石クラス委員！　ありがとう、頼むよ！」

鼻が曲がりそうな汚臭のそれを受け取った瞬間、

私はとんでもない考えを思いついてしまった。

お婆様を納得させ、他言せず彼氏面もしない、都合の良い相手。

私はその糞尿で汚れたトイレブラシをビニール袋にしまい、こっそりと持ち帰る事にした。





私は学校からの帰り道、処女を捧げる相手の事ばかりを考えていた。その事実から来る恐怖と屈辱からか、私の心臓は早鐘のように鳴り続けていた。

【ミコト】「…ただいま戻りました、お婆様」

【お婆様】「おや、おかえり。見た所二人のようだが、相手は見つからなかったのかい？」

諦める気になったかい？」



お婆様は私を挑発するように鼻で笑った。

私がただの小娘で、どうせやらないだろうという見下した態度に、私はカチンと来た。

【ミコト】「お婆様の目は節穴ですか？ ほら、ちゃんと用意してきましたよ。」

最強の退魔師たるこの私が、処女を捧げるにふさわしい相手を…」

これで後に引く事はできなくなった。私はビニール袋から、処女を捧げる相手を取り出した。



【ミコト】「…と、これが私の処女を捧げる相手です」

【お婆様】「なっ…それ、トイレブラシじゃないかい…しかもそんな汚い…」

そう言うて、私は糞尿のごびりついたトイレブラシをお婆様に見せつけた。
さすがのお婆様も、これには予想外だったようで、しばらく絶句して固まっていた。
あれだけ私を小娘扱いしたお婆様を出し抜いた事で、私は少しだけ溜飲が下がった。

【お婆様】「…お前の覚悟はよくわかったよ。

でも、本当にそんな糞まみれのブラシを入れられるのかい？

今なら、土下座で許してやらん事もないよ」

【ミコト】「許してもらっ必要などありません。

これで私の事を認めて頂きます！」

お婆様はさらに私を挑発し、侮辱を繰り返す。

私は後に引けなくなつて、その場で座り、挿入の準備をした。





【ミナト】「……」

改めて、トイレブラシを見る。
糞尿がこびりつき、吐き気を催す
悪臭を放つ、素手で触れるのも
ためらわれるレベルの汚物を
膣にねじ込み、処女を捧げるのだ。

【お婆様】「ほれ、どうした？ 怖気づいたか？」

これを挿入してしまえば、私は死ぬまで、

糞まみれのトイレブラシに処女を捧げた女として生きる事になる。

しかし、退魔師になると決めた時、命を捨てて正義を守ると誓ったのだ。

私は割れ目を無理やりこじ開け、一気にトイレブラシをねじ込んだ。





【ミコト】「…ひぎっ…ああああっっー」

ぶちぶちぶちぶちっ…!!

身を引き裂く激痛と共に、糞まみれの
トイレブラシが膣内へと侵入する。
皮肉にも付着した糞尿が潤滑液となり、
スムーズに膣内へと入り込んでいった。

【ミコト】「あっ…ああっ…」

厳しい訓練で苦痛には耐えられるつもりでいた。

しかし、ズキンズキンと激しい痛みが股間から響くたびに、

取り返しのつかない事をした絶望感で眼の前が真っ暗になる。

自分は今にも弱かったのかと、思わず涙を浮かべてしまう。





【お婆様】「…それで終わりがいい？ 敵がその程度で手を止めると？」

お婆様の一言ではつと我に戻る。

そうだ。私は退魔師なのだ。

退魔師として敵の陵辱に耐えるため、
トイレブラシで処女を捨てたのだ。

【ミコト】「う……ぐっ……あああうっ！」

私は覚悟を決めて、さらにトイレブラシを押し込む。

ブラシは膣壁に糞尿を塗りつけながら、奥へと入り込んでいく。

そして最深部、感触の違う場所に当たった瞬間、全身に悪寒が走った。

本能が拒絶していると理解出来る。ここから先は入れてはならない、女の子にとって神聖な場所。
しかし、私はさらにトイレブラシをねじ込むように、その奥へと押し込んだ。



